

藤村の女性観

宇野 憲 治

はじめに

藤村の死に臨んでの言葉は、「涼しい風だね」だったという。倒れたのが夏の午前中だったこともあり、そのように感じたのかも知れないが、波乱に富んだ藤村の一生を思う時、その一生からやっと解放されたという安堵感から発せられた言葉のように思われて仕方がない。

人生を振り返って見ると、その人生には、いくつかの節目がある。その節目に気が付かず、無難に通り返り過ぎて行く場合もあろうし、それを意識し、苦悩し、ついには死を決意するに到る場合もある。大きく人生観が変化するのは後者の場合が常なのである。人と人との出会いと別れ、宗教・思想等の出会いと別れ、その人に関わる重大な事件、これらがその節目の最大の要因となる。

このことは、藤村七十二年の生涯においても例外ではなかった。ここでは特に、藤村と女性との関わりに注意しながら、藤村の女性観、その女性観の変遷について考察して行こうと思う。

考察するに当って、結論めいたことを先に述べるが、私は、藤村の女性観は大きく六期に分けることができるのではないかと思う。幼なじみの大脇ゆふへの思い、佐藤輔子との出会いと別れ、秦冬子との結婚と死別、島崎こま子との新生事件、雑誌「処女地」の発刊、加藤静子との結婚とその後……これらが女性観変遷の転換点とな

っているように私は思う。他にもいろいろ考えられる。実母ぬい・姉その・広瀬恒子・橘糸重・『処女地』に集った女性たち……多かれ少なかれ藤村の生き方に影響を与えた女性たちである。これらすべての女性たちに触れる余裕は今はない。これらの女性たちの多くについては、伊東一夫氏の「藤村をめぐる女性たち」(一)と(二)『東洋』昭54・11(昭57・10)にすばらしい論考がすでにある。

私は、以下、「藤村の女性観」を考察するにあたって、伊東一夫氏のこの調査・研究に拠るところ大なるものがあることを、まずここに断っておきたいと思う。

—

大脇ゆふは、明治五年生まれで、藤村と同年である。隣家大黒家の娘として生まれ、藤村が上京するまでの幼なじみのひとりであった。のち、妻籠脇本陣の林亀寿郎と結婚した人である。藤村の『若菜集』に収録されている「初恋」のモデルとされ、後年、藤村より自筆の「初恋」の詩編を送られてもいる。

幼い頃のゆふとの交遊については「幼き日」(明45・5(大2・4)に詳しく描き出されている。その一節に、

・私は八歳の昔に早や初恋を感じた少年で……

・私は女といふものに初めて子供らしい情熱を感じました。私はお文さんを堅く抱締めたこともあります。斯の子供らしさは、近所の他の家の娘にも起りました。

・お文さんの許は極く懇意で、私の家とは互に近く往来しました。風呂でも立つと言へば、互に提灯つけて通ふほどの間柄でした。

・其日まで私は夢中でお文さんと遊んで居て：(略)：私は唯道さんに見られたといふだけで、何となく少年らしい羞恥を感じました。それきり私はお文さんを離れて、今度は道さんの、それから他の男の児と遊ぶやうに成りました。

・私達は桑島の間にある林檎の樹の下を歩き……

と、ここで、「文さん」とあるのが「ゆふさん」で、確かに、ここには、幼少期に誰れもが一度は経験する、幼なじみへの淡い初恋の思いが記されている。しかし、ここには、「初恋」の詩編にみられるような、色濃い官能の臭はあまり感じられない。また、林檎の栽培状況を調査してみたところ、藤村が上京した明治十四年の時点で、馬籠で林檎の樹を見たり、また実を食べたりしたということは、考えられない。「幼き日」にしばしば登場する林檎も虚構であろうし、「初恋」の林檎も虚構であろう。だが、「初恋」がつくられた仙台時代には、既に仙台には林檎があり、とすると、「初恋」の詩は、幼少期の大脇ゆふとの思い出を下敷にはいるものの、藤村仙台時代の女性への憧憬が、女性観がよく出ている作品と言った方がよからう。

上京後の藤村の女性への関心はあまりよくわからない。しかし、この頃の読書傾向に関しては、平田秃木「若い折の藤村君」等によれば、シエクスピア、ワーズウース、テニス、ゲエテ、バイロン、西行、芭蕉等をよく読み、浪漫的憧憬が強く掻き立てられていったようである。特に、先輩である北村透谷の燃え立つような激越な生き方、また、「厭世詩家と女性」等に見られる、恋愛至上主義的な考え方に魅せられていった。その間の事情については、藤村自身の作品『櫻の實の熟する時』・『春』等に詳しい。が、一方で、これらの作品について、多くの研究者から事実と虚構の問題について鋭い指摘があることも確かである。これら先人の研究を考慮しながら、藤村の女性観に多大の影響を与えた、佐藤輔子について行くことにする。

輔子については、『櫻の實の熟する時』では、「勝子」の名前で登場してくる。

・勝子は二つある組の下級の生徒で、…（中略）… 処女をとめのさかりを思はせるようなその束ねた髪と、柔かでも豊かな肩のあたりの後姿とは、言ひあらはしがたい女らしさを彼女に与えた。

（十一）

・おごそかなエホバの神のかはりに、自分の生徒の姿が瞬とまつた眼前にあらわれて来た。…（中略）… 捨吉は教へるといふ勤めの辛さを味つた。どうかして自分の切ない情を勝子に伝へたいとは思つても、それを伝へようと思へば思ふほど、余計に自分を制へてしまつた。

（十一）

と、描写されている。藤村の眼に映つた輔子の姿といつてもよい。「恋愛は人世の秘鑰なり。恋愛ありて後世人あり」という透谷の言に魅せられた藤村にあつては、輔子への思いは切なるものがあつたに違いない。しかし、藤村と輔子との関係は教師と生徒、当時にあつては、世にあつてはならぬ恋であり、しかも、輔子には許婚者がいたのであるからなおさらであつた。

星野天知の『黙歩七十年』によれば、

島崎胸底の秘に付き同情に堪へず、密かに本人輔子へ漏らしたのは悪い老婆心であつたと後悔して居る。輔子の家庭は封建時代の土風其儘で、既に親の取極めた許嫁もあり、当人の本性も堅実で柔順であるから、油然と湧き起る情熱との苦闘は正視するに忍びなかつた。

とある。『春』に影響されたと思われる記述もあるが、藤村の輔子への思いが混合されているように思われる。敬

度なキリスト教の信者であった輔子にとっては、この「天知の老婆心」に驚きはしたであろうが、全く論外のことであつたと思われる。今残されている、佐藤輔子の日記を読むとこれらの事情が明確となる。その後、輔子は許婚者であつた鹿討豊太郎のもとへ嫁ぐが、四ヶ月足らずで急逝している。輔子の結婚、急逝……このことは、二十三歳の藤村にとって大きな衝激であつたらう。そしてこのことが、輔子をして、一種永遠の女性像を藤村の心奥に深く刻み込ませるのである。

また、『春』の中では、

・親切な、心のいい許嫁の人のことを考へるたびに、人知れず小さな胸を傷めずにはいられなかつた。

(六十九)

・妹の知らない涙は思はず勝子の頬を流れた。

(六十九)

・岸本に対して自分の執るべき道が見当たらない。どうかして自分らはその方角に進みたい。一生の友だち

(七十)

——なんとといふ楽しい思想かんがへだらう。

・許嫁の人の前にすべてを告白して、「しかし、わたしはあなたの言ふとおりになります」と投げ出した勝子、それを聞いた許嫁の人、それから起こつて来た種々の混雑した光景、結局国の方へ勝子を連れて帰らうとする

父親の嘆き……

(八十三)

と、結婚前の輔子の心境を勝子に托して描写している。この描写を見る限りにおいては、二人は、お互い思い合ひながらも、許嫁がいるために離別せざるを得ない心境として描いている。どこまでが事実であり、どこまでが藤村の虚構であるのか判然とはせぬが、伊東氏の言うように、「藤村の『春』は、このような堅信者の輔子を自己の分身である岸本のロマンスの相手に造形し、藤村は自己の欲情を輔子に移したのである。」「同様な虚構化は『春』の

峰子のモデルであるキリスト者広瀬恒子においても同様である。」と見るのが、一応正しいと思われる。

このような意味からすると、藤村の佐藤輔子への思いは一方的なものであり、片思い的要素の強い恋であったということができる。『春』の次の一節が注意される。ある人に托して捨吉の恋を分析しているが、実は藤村自身自分の恋を分析していると思われるからである。

ある人と言はせると、岸本は自分相手の塊りである。彼の恋は人と一緒に死のうといふ恋で、人と一緒に生きようといふ恋ではない。彼は何事も人の為に尽さうとしない。殆んど人のことを考へない。彼は深く愛するやうに見えて、其实すこしも愛して居るのではない。彼は真に愛を解する人でない、斯う評する人もある。

(六十九)

この「ある人」の評が、この当時の藤村の輔子に対する愛を端的に語っているように私は思う。このような愛し方では、実際には恋愛とは言えない。思われれば思われるほど、相手の女性は恐しくなっていくのではなからうか。男性・女性の性格によるので、一概に一般化はできないが、現実には『春』に描かれた世界とは、大いに相違しているのではなからうか。"自分はこんなにも相手のことを思っているのに、相手は少しも自分に答えるだけの誠実さを見せてくれない"、そのもどかしさが『春』の勝子の描写を生んだのではないかとも思う。

愛しながらも別れる、それは相手の輔子の気持ちではなく、筆者藤村の一方的な思い込みによる錯覚か、でなければ、藤村自身の憧憬と理想を願望として描出したのではなからうか。ここに、この時期特有の藤村の女性観が典型的に見てとれる。一方的な、片思い的な愛、それによる失恋、相手の輔子の急逝、それらの思いが昇華され、佐藤輔子は藤村の理想の女性へ、永遠の女性へと行って行ったと思われる。藤村の号の由来も、一説には、佐藤輔子の「藤」から来ていると言われている。

『春』に描かれた時期のすぐ後に来るのが『若菜集』の書かれた仙台時代である。この時期は、「孤独とエロテイズム」の狭間で、切なる思いが募る時期である。この時期に関しては、藤一也氏の調査・研究による名著『島崎藤村の仙台時代』（昭52・9・25 万葉堂出版）がある。この中に、藤村の恋愛詩を考える上で特に注目値する一節がある。

藤村が田代家から三浦屋に移って行った事の中には、布施てるや田代きよのことがあったであろう。特に淡は真面目にすると藤村とのかを考えていたかも知れない。

折角の仙台の地での結婚話など、藤村にはタブーであった。それと同時に、藤村の内部にも危険なものが根ざしていた。恋愛詩におけるエロテイズム（官能への憧憬）である。

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかかるとき

たのしき恋の盃を

君が情に酌みしかな

（初恋）

と歌う時、それは既に初恋的感情からは逸脱した、エロテイズムの世界になる。そして、それらは後年の『家』・『新生』の世界に直接する私小説的官能の世界なのである。

まさに、『若菜集』の『若菜集』たる所以はこの官能美と恋との連結にあると私も思う。「初恋」の詩は、単なる

「まだあげ初めし……」という、淡い初々しいだけの「初恋」ではない。二十代半の、一度は失恋を味わい、本能的な性衝動を抑え苦しんでいる人の口から漏れ出た、女を思う熱い切ない恋の溜め息なのである。「六人の処女」の総題を持った、「おえふ」・「おきぬ」・「おさよ」・「おくめ」・「おつた」・「おきく」は、すべて恋に狂い、男のもとへ走るような女の狂おしい恋が主題であるが、これらの女性の姿には、もの静かでありつつましく去って行った輔子の姿が逆投影されているように思われてならない。「六人の処女」のようにもっと激しく求めて来て欲しかった、もしも自分が輔子であったなら、「六人の処女」のような生き方をしたかった、そんな思いに駆り立てられたに違いない。現実にはあり得ないことであっただけに、一層もどかしく、藤村の願望と憧憬が募ったであろう。「おくめ」の一節

砕かば砕け河波よ

われに命はあるものを

河波高く泳ぎ行き

ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も

吾身はすべて火炎なり

思ひ乱れて嗚呼恋の

千筋の髪の毛に流るゝ

には、女ごころの一途な思いが端的に出ているが、ここにも、私には、佐藤輔子を永遠に失った藤村自身の切なる

叫びが詠い込められているとしか思われないのである。

また、讚美歌を翻案したと思われる「逃げ水」には、

すぎこしゆめぢを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのちもつとめも

このつみゆえ

たのしきそのへと

われはゆかじ

とあり、罪と恋とを一つに見ながら、恋の罪を犯してゆく人の姿を描き出している。あつて欲しい女性の生き方、しかし、現実には憧憬することしか許されぬ孤独な藤村の思いが見事に仮托されている。この意味からすると、これら『若菜集』の多くの詩編は、藤村自身の恋心を女性の立場に置きかえて歌ったものであると言ってよいように思うし、また、抑え難い藤村自身の「おぞき苦闘の告白」がそこにあると言ってよいように思う。

四

次に、藤村の実生活上においても、人生観上においても大きな変化が起きるのは、小諸への赴任と結婚ということ

とである。この間の事情は「水彩画家」・「家」・「新生」・「孤独」等によって詳しく知ることができる。が、殊に「家」には、この間の事情、即ち、結婚直前の様子から、小諸での新生活・子供たちの誕生と死・東京での生活・お雪（冬子）の死の直前のことまでが実に詳しく描出されている。

佐藤輔子への思いも消えやらぬ明治三十二年、兄たちが維持しようとしている「旧い家」の崩壊の危機、そこからの脱出をねらって「新しい家」を自らの手で築きあげようと結婚を決意する。見合い結婚ではあるが、「新しい生涯に入ろうとする希望で輝かないものはなかった」（上・五）のである。もちろん妻のお雪も同様である。その妻の心理は次のように描かれている。

彼女は新婚の生涯を始めた。奉公人を多勢使つて贅沢に暮して来た日までのことに比べると、すべて新たに習うやうなものである。とはいへ、お雪は壮健な身体を持つて居た。彼女は夫を助けて働けるだけ働かうと思つた。

（上・三）

とある。新生活を始めるにあつたての妻お雪の覚悟でもある。お雪のモデルである冬子は北海道函館の網問屋の娘として生まれ、多くの奉公人にかしづかれて育つた。父の勧めもあつて上京し、明治女学校で明治二十六年九月から明治二十九年四月まで学んでいる。その後しばらく巖本善治の手伝をしていた。結婚までは恵まれた何不自由のない暮らしであつた。しかし、藤村と結婚後のその生活の様子は大きく一変する。小諸での質素儉約な暮らしに加えて、近所には知り合いの人もほとんどいない孤独な生活となる。一方、三吉（藤村）の方は、妻の夢を碎くかのように、事々に妻に田舎での流儀を強要する。それは次のようにも描かれている。

彼女の風俗は、豊かな生家の生活を思はせるやうなもので、貧しい三吉の妻には似合はなかつた。紅く燃えるやうな帯揚などは、畠に出て石塊を運ぶといふ人の色彩ではなかつた。

三吉はお雪の風俗から改めさせたいと思つた。彼は若い妻を教育するやうな調子で、高い帯揚げの心は減らせ、色はもつと質素なものを扱へ、金の指輪も二つは過ぎたものだ、何でも身の辺まはらを飾る物は藏つて置けという風で、斯の夫の言ふことはお雪に取つて堪へ難いやうなことばかりであつた。…(中略)…とはいへ、お雪は夫の言葉に従つた。

(上・三)

とある。藤村の描くお雪であるので、現実の冬子とは相違するかも知れぬが、これらの描写等でみる限り、夫の言葉には従つたものの、憧憬と現実とのあまりにも大きい落差、この事實は結婚早々の冬子に大きな衝激を与えたことであろうし、苦悩を深める要因になつていったことであろう。『若菜集』の詩人藤村と日常茶飯について質素・儉約をこと細かく言う藤村と……この落差の中で悩み孤独となり、かつての恋人であつた末太郎と手紙を取り換わすやうになるのである。この手紙を三吉が見てしまうとところに、三吉とお雪、現実の藤村と冬との「新しい家」での苦渋が始まるのである。「家」においては多少の誇張があるが、この事件は事實二人の間に起こつた出来事である。精神的には離婚寸前までも行きながら離婚せずに済んだのは子供ができたためであつたのだろうか。この事件により「家」の中の二人は、精神的つながりのない存在になつてしまつてゐる。少なくとも「家」ではそのやうな二人の關係として描写されている。その象徴的場面が次の箇所である。

「俺の家は旅舎やどやだ——お前は旅舎の内儀おかみさんだ。」

「では、貴方は何ですか。」

「俺か。俺はお前に食物をこしらへて貰つたり、着物を洗濯して貰つたりする旅の客サ。」

「そんなことを言はれると心細い。」

「しかし、斯うして三度々々の御飯を頂いてるかと思ふと、難有いやうな氣もするネ。」

斯様な言葉を夫婦は交換した。

(上・五)

とある。実に精神的には冷え切った淋しい夫婦として描かれている。期待をもって築こうとした「新しい家」であつただけに、藤村自身の失望も大きかつたのかも知れない。

だが、子供だけは一人、二人……と七人までも成している。精神的には冷え切つていても肉体的にはそうではなかつたのか。何か矛盾のように思われるが、「家」の中ではその点矛盾なく描かれているように思う。精神の上で一度齟齬が生じてしまつた二人には、肉体の上でつながらるしか道が残されていなかったのか。「新生」(第一部十四)には

長いこと妻を導かうとのみ焦心した彼は、その頃に成つて、初めて何が園子の心を悦ばせるかを知つた。彼は自分の妻も亦、下手に礼儀深く尊敬されるよりは、荒く抱愛されることを願ふ女の一人であることを知つた。

と記されている。結婚前に抱いていた女性へのイメージと結婚後の現実との落差、精神的な生活よりも肉体的な生活に満足して行く妻に、はつきりと女を見ているのである。

洋燈の影で書籍ほんを読みながら聞いた未だ娘のやうな妻の呼吸——それも三吉の耳にあつた。彼は女といふものを知りたいと思ふことが深かつたかほりに、失望することも大きかつたのである。(「家」上・五)

とも記している。「家」の中では、精神的齟齬の原因の大半を妻の側の責任とみて描いているが、実際には、藤村の側にもかなりの責任があつたのではないかという気がする。新婚そうそうからの精神の行き違い、子供が何人も出来た家庭での煩雑さ、都会から離れた小諸での異常なまでの質素な生活、仕事が思うようこころに進捗しないための苛立ち……これらのことが二重・三重に重なり合つて、妻へのつれなざとなつたのではないだらうか。

佐藤輔子への思慕、その輔子が他の人と結婚し、結婚後四ヶ月目で早くも死去している。そのため、輔子への思

いが理想化され永遠化され聖化されていただけに、日常にあつて、従順で夫の言いなりになる、まして肉体的満足にこと足りていたような妻には、何かやり切れないものを感じたのかも知れない。その点を「家」では必要以上に誇張しているようにも見えるし、裏を返せば自己弁護しているようにも見える。とに角、天上ばかりに憧れていた藤村にとって、結婚という事実は、理想よりも現実を、精神よりも肉体を、天上の処女よりも地上の女を見ざるを得なくさせたといつてよい。俗な言い方をすれば、一步大人になったと言つてもよいかも知れない。

この頃の談話に「『女は如何なるハズミにて墮落するか』への回答」(『新古文林』明39・10)というのがあるが、その中で、

性格の缺陷といふことが有りませう。無智、懶惰、浮氣、過度の虚栄心等はそれです。しかし、墮落の原因は唯その人の性質にばかりあるといふことも出来ません。境遇は多くの女を墮落に導くやうです。：(中略)：最後に私は過度な性格を挙げませう。

としている。「家」の中でのお雪の描き方は、まさにこの考え方と一致していると考えてもよからう。

しかし、現実のモデルとなった冬子は、「家」で描かれた通りの女性であったのだろうか。このことに關しては、近年、泰冬子の遠縁にあたる森本貞子『冬の家』(昭62・9・25 文芸春秋社)の考証によって、全容がほぼ明らかになった。その著の中で、「家」の偽隣性を明確に実証した。藤村研究の上においても衝動的な著作であった。その中でも、次のように述べてある箇所は印象的である。

藤村の女性の嗜好を「処女崇拜」といったのは評論家の亀井勝一郎であるが、そのみではなく藤村との関わりの深い女性はいずれも「知的レベルの高い女性」である。佐藤輔子は明治女学校で才媛とうたわれていた。関西漂泊中に藤村が好意をよせた広瀬恒もまた明治女学校出身で、のち同志社の教壇にたっている。橘

糸重もまた、音楽学校の助教授。：（中略）：インセストの相手のこま子も絵画や歌に長じた女性で、後妻の加藤静子も女権運動家エレン・ケイを紹介した知的女性である。藤村の小説「家」のお雪（お冬）は成金の娘で知性にうとく描かれているが、お冬もまた藤村好みの、当時としては知的教育を受けた女性の例外ではなかった。

とある。おそらく現実の冬子は、小説の宿命としてドラマチックに藤村の色で染めあげられたお雪よりも、一層賢明な女性であったのだろう。しかし、当時の藤村の目に映った冬子は、多少誇張はあるにしても、実際このように見え感じたのかも知れない。もし、「家」のお雪のように見られ感じられていたのであるなら、冬子にとって大変不幸であつたらうし、辛い結婚生活であつたらうと思う。

五

妻冬子の死以後、藤村の生活及び生活態度は、より一層つましく、何事に関しても節制を主とし、また、内に起つて来る種々の激情・誘惑にも大変警戒するようになる。「新生」の中に次のような描写がある。

彼自身の部屋をトラピストの修道院に譬へ、彼自身を修道院の内の僧侶ほうしんに譬へ……

多くの場合に岸本は女性に冷淡であつた。彼が一箇の傍観者として種々な誘惑に対つて来たといふのも、それは無理に自分を制へようとしたからでもなく、むしろ女性を軽蔑するやうな彼の性分から来て居た。

（「新生」第一部 十五）

とある。まさに、藤村の実感であつたらうし、このように女性を見なさなければ、反対に自分自身が女性に引き付

けられ、墮落していくのではないかとの危惧の念からの自己防衛でもあったろう。

彼は自分の倦怠や疲労が、澁み果てた生活が、漸く人としてのさかりな年頃に達したばかりでどうかすると
早や老人のやうに震へて来る身体が、それらが皆独身の結果であらうかと考えて見る時ほど忌々しく口惜しく
思ふことはなかつた。

〔「新生」第一部 三〕

とある。孤独で節制した生活を続ける一方、妻亡き後の自己の性衝動のはけ口の欠除、それへの悩みと見ることも
できる。父の血、母の血、過去の「家」につながれた自分自身の内部を流れるどうしようもない血、その血ゆえに
一層自己の衝動を抑えなければならない。しかし、その衝動が一瞬の心の隙をついて表面に表われることがある。
真偽は定かでないが、そのことは妻の生前にもあつた。「家」の中の描写であるが、祖母の葬儀のため、妻が二ヶ
月ばかり函館の実家へ帰郷して留守の時のことである。

不思議な力は、不図、姪の手を執らせた。それを彼は奈何することも出来なかつた。…（中略）…

「奈何したと言ふんだ——一体、俺は奈何したと言ふんだ。」

と彼は自分で自分に言つて見て、前の晩もお俊と一緒に歩いたことを悔いた。

容易に三吉が精神の動揺は静まらなかつた。

〔「家」下三〕

とある。ここに描かれている姪のお俊は、「新生」の節子ではない。「新生」事件のモデルとなつたこま子とは違
う。しかし、「家」のこの箇所を描いている時（明43・末？）、既に妻冬子は亡くなっている。妻なき後の抑え難
い利那の衝動が、このように身近かな他の女性に向かうという無意識の行動として、この場面に反映されているの
かも知れない。ともあれ、このような衝動が身内に強く感じられるからこそ、「女性に冷淡」であるかのように表
面をとりつくりうるのである。言うことと思ふことと、そしてその思いは、妻不在の際自分自身でも思いがけない衝

動となつて表面化してゆくのである。あるいは、このような行為に出ないまでも、妻なき後、藤村の身内は、この種の血のさわぎで満たされ悩まされたに違いない。四十歳という血氣盛んな年齢、表面では「女性に冷淡」を装いながら、内面から突き上げて来る性の衝動、妻なき後の藤村の実生活は、その自己自身との闘いであつたと思われる。自制に自制を重ねたあげく、目には見えない「不思議な力」の誘惑に身をゆだねることとなつてしまふのである。これが後に世に言う「新生事件」である。作品『新生』（第一部・第二部）には、その間の事情が詳述されている。例によつて自己正当化がなされているために、その真偽のほどは疑わしいし、また、当事者である女性の真実の心が隠蔽されているふしがある点については遺憾にも思う。しかし、作家藤村のその時の心情としては実に真実なものであつたのではないかと私は思う。

苦悩の末、藤村は秘密裏にフランスへ旅立つ。こま子とは文通を通してその心情を語り合うことになるのだが、続けられ続けるほど苦しい心境に追い込まれる。こま子にこれ以上期待を持たせてはならないと、心を鬼にしてその文通を断つ。異国の地に骨を埋める覚悟のフランス行きであつたが、その地で第一次世界大戦に遭遇、やむなく帰国の途に着く。帰国後の彼に課せられた重い務めは、こま子の身心両面からの救済と、兄の家族の経済面からの救済とであつた。しかし、救済どころか、またしても、こま子の情にほだされるかたちで、以前のような異常で甘美な悦楽に陥つてしまう。このような不自然な状態には、早晚行き詰まりが来ることは目に見えている。この時彼は、フランスのパリ、ペエル・ラセエズ墓地に眠る相愛の男女、アベラールとエロイーズの愛の理想を思う。

あのペエル・ラセエズの墓地で見て来た古い御堂の内に枕を並べて眠つて居た僧侶と尼僧との寝像が物言ふやうに成つた。この二人は終生足ることの無い精神的な愛情をかけたとした文句の彫りつけて掲げてあつた白い大理石などはまだ彼の眼にあつた。彼はあの御堂の周囲まはりを廻りに廻つて立去るに忍びない思ひをして来

たその自分の旅の心を節子に話した。

〔「新生」第二部 七十〕

岸本は節子に珠数を贈った。：（中略）：覚束ないながらも宗教へと辿り行くとうとして居る彼女の手箱の中に、自分の贈った熱い思慕のしるしを置いて考へるのも楽しみに思つた。：（中略）：すくなくも彼が節子と共に辿り着きたいと願ふところは、多分に『友情』の混つた男女の間柄であつた。

〔「新生」第二部 八十八〕

とある。叔父と姪とのあつてはならない関係、その苦悩の果に到達した二人の救済の道、それはフランスで知つたアペラールとエロイズの精神的愛である。肉体的享樂的な地上の愛の地獄より抜け出し、共に歩む天上的永遠的な精神の愛、「新生事件」を通過した藤村の心には、このような愛を共に歩める女性像がイメージされ、固定化されて行つたように私は思う。それには、五十歳を過ぎた藤村自身の性的衝動の沈静化が必要であつたのかも知れない。

二人の愛は、ある理想へと引き上げない限りにおいては本当に墮落して行つてしまふ。「心を起さうと思はゞ先づ身を起せ」、この言葉は、当時の藤村自身の心情を端的に物語つていると思う。現実を乗り越え理想へ向う、しかし、理想化したものを追慕するだけであつては何にもならない。実践を通してより一歩でもその理想に近づくこと、それがとりも直さず、藤村にとつての「新生」への道であつたのかも知れない。これ以後の藤村は、いや増して贖罪意識が強くなり、また女性を見る見方は、否定的なものから肯定的なものへと大きく変化して行く。女性問題に関する社会的発言も多くなり、しきりに「女性の眼覚め」を説くようになってくる。

婦人の覚醒を伴はないやうな時代の革新は真に根本的なものとはなり得ない。

〔「婦人の眼覚め」大10・6〕

理智的に、無関心なくらいに冷たくなつて行かうとする人の心を揺り動かして、今の時代を暖めるものは、誠意ある婦人の涙ではなからうか。(同前)

これを実践に移したのが、大正十一年四月に創刊された婦人雑誌『処女地』である。大正十一年に刊行された『藤村全集』（新潮社・春陽堂・国民図書KKの刊行会、全十二巻）の収益が、この雑誌発行の資金源になっていた。すべて女性達の手でというのが旨であったが、編集方針・原稿の選定・補訂・経理等は藤村自身の手で行なわれた。発刊の意図について、『処女地』創刊号で、

来るべき時代の婦人のために：（略）：志すところは必ずしも一様ではありません。しかし、互いに取る道こそ異なれ、同じ婦人の眼ざめを期待します。そして同じ時代を歩む婦人が奈何に感じ、奈何に考ふるかも知つて頂きたい。

また、

わたしたちはこの『処女地』を小さな『生命の家』とも見て、自分等の内部から生れて来るものを育てて行きたい考へです。

とも言っている。深い眠りが女性自身の内部にあるからこそ、女性は覚醒しなければならない。「長いこと婦人は趣味に隠れ」ていたため、「知らず識らずの間に野性を失つ」た。だからこそ、「何よりも先づ今の婦人は失はれた野性を回復しなければならない」と考えるのである。

妻の死以後、女性を傍観的に否定的に見ていた藤村の考え方は、ここに来て大きく変化している。社会的な影響も考えられるが、藤村自身の主体的自己変革であると私は思う。女性の中へ降り立ち、進んで共に歩もうとする姿勢がよく見えてくる。『新生』二部の後半においての岸本と節子との関係のように、お互いをより高め合いた

い、女性に対して、そのような思いに強くかられて行ったようである。そうでなくては、自分も相手も共にだめになってしまう。公的場での発言を積極的に行うことにより、自分の気持ちをも引き締めたい。このような思いが、この頃の藤村にとって数多くの女性問題に関する社会的発言となって行ったようである。「四つの問題」(大11・1・22~24)・「婦人の力」(大11・2)・「信濃の婦人」(大13・1)・「人形の家」を讀みて(大13・1)等であるが、共通する内容は、古い慣習の中に閉じ込められていた婦人の覚醒への促しである。「新生事件」を契機として、藤村の女性観は一変したと言えるし、一步深く女性を見ることが出来るようになったと言えるようにも思う。

六

昭和三年、五十七歳で藤村は再婚した。『処女地』のメンバーの一人であった加藤静子とである。この時静子は三十三歳であった。藤村との出会いから結婚に到るまでについては、『ひとすじのみち―藤村とともに―』(昭44・6・10 明治書院)に詳細に記されている。その中であって、藤村の心理・性格を印象深く伝えている描写が何箇所がある。

大正十一年の春の日の夕暮れである。おそくまで編集の仕事を手伝った後、藤村から夕食の誘いをうける。しかし、母が用意してくれた夕食を思い、その誘いを断って帰ろうとする。その時の藤村の様子を静子は次のように伝えている。

頬は蒼白である。それはかすかに震えている。それから後に何が来ようとは、わたしは全く予期しなかった。わたしは何がどうしたと考えるいとまはなかった。平静を失った先生を見ることは、わたしは唯々恐怖そ

のものであった。急に先生の顔が目の前に迫ったかと思うと、先生の唇がわたしのそれにふれようとした。：

この場面は、加藤静子にとって大変ショックな出来事として記されている。その後、しばらくの間、『処女地』編集の手伝いに行っていない。しかし、同人仲間の誘いもあって、元通り平静を装って編集の仕事を手伝うようになっていく。それから何年か後、音楽会へ誘われた帰り、同じような藤村の姿に接することになる。

「ね、どこかへ……もうかえれない遠いところへ……ね、このまんまどこか遠いところへ……」わたしは、自分の身が氷るのを意識した。：（中略）：先生は、夢からハッとさめたような目つきをした。「アッ、あなたにはお母さんがいる。」

といった姿である。このような描写から判断すると、「新生事件」以後も、時とすると、何かに憑かれたような衝動にかられることがあったようだ。これと同じような姿は、藤村自身が描いた小説『家』でも、『新生』でも見られる。自分を抑えようとする心が強かっただけに、思わぬ衝動にふと突き動かされ、一瞬自己を失ってしまうのであろう。その衝動を受け入れたのがこま子であり、拒絶したのが静子であった。

「要約すれば、これは、このてがみを書くのに八年かかったという意味だね」（『ひとすじの道』）とあるように、「このてがみ」は、待ちに待ち、忍耐に忍耐を重ねて自己を告白した、藤村から静子への求婚の手紙であった。こま子との一件以来、自重に自重を重ねて来た藤村であったろう。しかし、この思い切った正式な求婚を静子が受け取ってくれたことで、藤村は救われたと私は思う。

二人の夫婦生活については藤村はひと言も語っていない？ その様子については、静子夫人の『藤村妻への手紙』（昭43・7・20 岩波書店）・『ひとすじのみち』（昭44・6・10 明治書院）・『落穂』（昭47・10・30 明治書

院)に詳しい。

ある時には十五、六年の間も夫であった藤村も、過ぎ去ったながい時をふりかえるなら、いつもわたしにとって、人生の先方を指し示してくれる一人の師であった。ここでは多くの場合、その人を先生と呼んで……

(『ひとすじの道』序)

とある。結婚後の二人の関係が象徴的に記されているようにも思う。「師と弟子」の関係、精神的に高め合うことの出来る関係、静かな精神生活を送ることが出来た藤村であったと思う。創作の苦悩は別問題として。

しかし、加藤千代三『流離の人』(昭53・12・1 文化出版局)の、藤村の孤独に眼をすえた次のような見解もあってみれば、結局は藤村自身の声を聞く以外に藤村の心理を探ることはできないようにも思われる。

わたしは、あの静子の猷身的な愛と誠実に包まれながら、却ってそのためにこそ、心を刻むような深い孤独をかみしめていたのではないかと思った。∴(中略)∴。静子との新しい愛の生活が創造できると信じたのであろうか。母の座に坐り得なかつた静子は、そのことのために、藤村の妻としても満ち足りてはいなかつたはずである。静子の愛は挫折していたのではないか。

とある。一面、鋭い指摘のように思う。もしそうだとしたなら、表面静かな晩年を迎えた藤村の孤独は、芭蕉の「この道や行く人なしに秋の暮」ではないが、実に深いものであったのかも知れない。

おわりに

「はじめに」にも記したように、私は、今のところ、藤村の女性観は大きく六期に分けられるのではないかと思

っている。

第一期は、春樹が大脇ゆふに抱いたような、誰れもが幼い頃経験する、異性への淡い思慕の情である。「幼き日」には、その頃の思いがよく記されている。

第二期は、佐藤輔子との一件に見られるような、青年期特有の処女崇拜的な恋慕の情である。永遠に得ることの出来ない女性への憧憬といってもよい。理想と現実の狭間で苦闘した時期でもあった。藤村にとっては、明治女学校教師時代、関西への漂泊、仙台時代がこの時期にあたる。

第三期は、冬子との結婚生活の時期である。女というものはっきりと認識した時期といつてよい。現実をいやがおうでも見ざるを得ず、精神的愛を求めながら、肉体的愛にとどまらざるを得ないもどかしさを痛感し、絶望した時期である。換言すれば、一步大人になったといつてよい。

第四期は、慕い来る女性への自己抑制と、自己の内部から突き上げてくる性衝動との葛藤の中で女性を見ようとする時期である。しかし、その衝動に負け、地獄のような苦しみを味わったのが、姪のこま子との一件である。女性を遠ざけようと自己抑制しながらもそれに負けてしまった自己の弱さを、一番痛切に感じた時期だったのでなかろうか。

第五期は、こま子との新生事件以後、加藤静子との結婚までの時期である。女性を、社会に開いた人格を持ったものと見ようとはじめる。これまでの藤村にはこの視点が欠除していた。この頃の藤村は、『処女地』の発刊と、女性問題に関わる多くの発言を積極的に行っている。加藤静子の『ひとすじのみち』に見られるような衝動がなくなつたわけではないが、より自己のコントロールが出来るようになった時期でもある。

第六期は、昭和三年以後の加藤静子との結婚生活であろう。『夜明け前』執筆の時期と重なる。執筆の苦悩はも

ちろんあろうが、この結婚により、精神的にも肉体的にもかなり落着いたと言ってよい。冷静にもの、が女性が見られるようになったのではないかと思う。

以上、大まかではあるが藤村の女性観の変遷を見てきた。迂余曲折の人生であったと言えるし、それに応じて女性観も大いに变化していったことができる。この中でも、特に大きく变化したのは、やはり「新生事件」の前と後とであろう。渡仏したことによって、また、社会情勢の変化もあろうが、個人的なものにこだわっていた女性観から社会に眼を向けた女性観へと、また本能を主体としたような肉体的・否定的女性観から、お互いが高まり合えるような精神と肉体との調和をめざす肯定的女性観へと大きく変化している。藤村の女性観とその変遷を、このように単純に整理してしまうこと自体、問題があると言えは言えるが、この藤村の女性観の変遷は藤村の人生観とも深く関わっている。藤村の人生観は、自己自身の強い意志で決定した、あるいは、男性との関わりの中で決定されたというよりは、今まで見て来たように、女性との関わりにおいて決定されたと言った方がよい。女性畏るべしである。